

# 物語に規律を与え、 数字に血を通わせる

佐藤郁哉

同志社大学商学部 教授

## 現場調査のアート&サイエンス

*The Social Order of the Slum:  
Ethnicity and Territory in the Inner City*

Gerald D. Suttles 著

University of Chicago Press 1968

社会学とその研究法について学ぶために渡米したのは1980年、25歳の時であった。留学先は、シカゴ大学である。5年半あまりの留学生活のなかで最も大きな意味をもっていたのは、師匠のジェラルド・D・サトルズ教授から受けた教えの数々であり、また「エスノグラフィー」という言葉との出会であった。

本書は、そのサトルズ先生がシカゴのスラム地区で行なったフィールドワークの成果をもとにして発表された都市民族誌の傑作である。本書(1968年にC. Wright Mills賞を受賞している)には、およそ3年にわたって現地で実際に生活し、またそこで見聞きして得られた情報が縦横に活かされている。そして、イタリア系、メキシコ系、プエルトリコ系、アフリカン・アメリカン系の住民が混在する地域において、それぞれのエスニック集団がいかにして過酷な状況のなかで中層階級のものとは異なる、独特の規範を形成して生活を送っているかという点が、名人芸ともいえる巧みな筆致で描きだされている。

私自身、日本での院生時代にはいくつかの少年院と刑務所で犯罪や非行に関する事例研究を行っていた。それを「フィールドワーク」と呼べないこともない。しかし、*The Social Order of the Slum*から私が感じとったのは、実際にものごとが起きる現場で調査者が見聞きしたファーストハンドの情報をもつ、はかりしれない価値と重みであった。

そのような、現地で行なう調査およびその調査を通して得られる情報をもとにして書かれる報告書を「エスノグラフィー」と呼ぶということを知ったのは、サトルズ先生の“Urban Ethnography: Situational and Normative Accounts”というレビュー

論文を通してであった。この論文を読み、またそのなかで紹介されているいくつかの都市民族誌を読み漁っていくなかで、現場での観察記録を中心にしたりサーチの概要が次第に見えてきたような気がした。また、その種の作業の本質を言い表わすうえで最もふさわしい言葉を見つけることができたように思えた。

## 命名以前の「GTA」がもつ凄み

*Awareness of Dying*

Barney G. Glaser and Anselm L. Strauss 著

Aldine 1965

もっとも当然ではあるが、特定の調査法を表す言葉について知ったからといって、それだけで現場調査が行なえるわけではない。すぐれた都市民族誌の数々を読み込んでいくなかで、一刻でも早く現場に出たいという思いは募るいっぽうであった。しかし、そのためには、所定の科目を履修し資格試験に合格したうえで、さらに博士候補生としての審査を受けなければならない。

待ち焦がれていたフィールドワーク関連の授業によりやく参加することができたのは、渡米後3年めの春のことであった。講義のタイトルは“Field Method”，担当はサトルズ先生である。その講義におけるテキストの1つとして指定されていたのが、グレーザーとストラウスの*The Discovery of Grounded Theory*であった。

この本を読み進めていったときには、「エスノグラフィー」という言葉に出会ったときと同じような新鮮な感動を覚えた。というのも、自分が調査現場で思い悩んでいたさまざまな事柄、つまり、データの処理、事例の位置づけ、「理論」の捉え方など、一つひとつの疑問に対してきわめて明快な答えが示されていたように思えたからである。そして、そのような素晴らしい解説書の著者たち自身がどのような現場調査を実践していたのかと思うのは、ご



く自然のなりゆきだといえよう。

そこで読み始めたのが、同書の2年前に刊行された *Awareness of Dying* である。その内容は、私が抱いていた期待にたがわぬものであった。この本は、6つの病院を対象にして、3年以上にわたって行なわれた丹念な現場調査をふまえて、終末期医療を受けている患者をとりまく社会的相互作用のあり方という問題に取り組んでいる。特に、近づきつつある死期を、患者自身および患者をとりまく人びとがどのように捉え、また互いの捉え方についてどのように認識しているかという点が中心的なテーマになっている。

いま読み返してみてもあらためて確認できるのは、この本は、*The Discovery of Grounded Theory* で開陳されている方法論の応用編などでは決してない、という事実である。実際、*Awareness of Dying* に見られる、さまざまな種類の知見を組みあわせていく著者たちの手腕には、まさに名人芸としか言いようがない面がある。それは、その後グラウンデッド・セオリー・アプローチないしGTAという略称で解説されている、一連の手続きにはとうてい還元しえないものだといえる。

## 数字に血を通わせる

*Say it with Figures*

Hans Zeisel 著

Harper & Row 1947, 1985

ここで注意が必要になってくるのは、上にあげた2点の著作における名人芸は、日本の社会学の領域である種の定性的調査をさして言われてきた「名人芸」とはまったく別ものだという点である。

古川柳に「講釈師見てきたような嘘をつき」というものがある。確たる根拠（エヴィデンス）を示すことなく、なんらかの（社会的）テキストを読みとった結果を、修辞を駆使して物語としてまとめた論考は、研究論文ないしモノグラフと言えるはずもない。むしろ、講釈師による巧みなフィクションというよりは、稚拙な「読書感想文」に等しいものである。その意味では、定性的データに基づく論文や報告書で展開されるストーリーが「見てきたような嘘」に墮してしまわないように、その物語に対してなんらかの形で規律を与える必要がある。その点

に関しては、数値データを中心とする調査研究に学ぶべきことは非常に多い。

もっとも、定量的調査に基づく論文や報告書からは、調査対象について「高度5万フィートから俯瞰して」（米国のある経営学者の評）解釈を下しているような味気なさともどかしさを感じる場合が少なくない（問診も触診もなしに、検査結果だけで病名を告げられたときの感じにもちかい）。その点からすれば、定量的調査については、なんとかして「数字に血を通わせる」必要があるのだといえる。

このような点について考えていくうえで拠りどころにしてきたのは、ハンス・ザイゼルの *Say it with Figures* である。よく知られているように、本書は、1947年の初版刊行以来、世界的なベストセラーとなり、日本では1962年に木村定・安田三郎訳で『数字で語る』が刊行されている。2005年には、私自身が第6版を底本として訳書を刊行することになった。

その翻訳作業を通してあらためて確認することができた点が1つある。それは、この本で紹介されている多くの研究事例の背景には、ていねいな聞きとり調査を通して数値データを収集し、また説明図式を練り上げていく地道な作業が存在している、という事実である。その意味では、ポール・F・ラザースフェルドが本書に寄せた序文には興味深い記述が含まれている。そのなかで、ラザースフェルドは、ウィーン時代に盟友のザイゼルとともに、定性的データを丹念に分析していたという事実が述べられているのである。今日の統計的社会調査の基礎を築いた社会学者の1人であるラザースフェルドが、そのキャリアの出発点において定性的データをていねいに読み込んでいたという事実を理解することは、欧米では少なくとも1980年代前後までは存在したとされ、日本ではいまなお完全に解消されたとは言い難い「定量的調査法 対 定性的調査法」という対立関係の背景について理解していくうえでも多くの示唆を含んでいるように思われる。